

# 韓国語の「同一語根の単語が連続する動詞群」の 捉え方について

— 同族目的語動詞と合成動詞に照らし合わせて —

朴 恩 珠

## Concept of Korean “continued verbs from the same root word”

— In comparison with Cognate Object Verbs and Compound Verbs —

Eunjoo Park

### 抄 録

本稿は韓国語の同一語根の単語が連続する形態の動詞群（以下、「連続体」型動詞とする）について考察したものである。「連続体」型動詞は語根が同じ名詞と動詞で構成されているため、意味的には同族目的語動詞の役割に類似し、形態的には合成動詞と類似しており、位置づけが明確になっていない動詞の1つである。

考察方法は、まず、同族目的語動詞構文と「連続体」型動詞構文の用例を取り上げて意味役割を比較した。次に合成動詞のプロトタイプに「連続体」型動詞を照らし合わせた。

その結果、「連続体」型動詞は直接的かつ隠喩的な意味を表すことができるので、同族目的語動詞より働きの領域が広いが、同族目的語動詞のような文形成はできなかった。また「連続体」型動詞は合成動詞のプロトタイプには当てはまらない構成であった。つまり、「連続体」型動詞は同族目的語動詞や合成動詞に属さない固有の性質を持つ動詞群と考えられる。

**キーワード：**同族目的語動詞、合成動詞、連続体型動詞、プロトタイプ

(2017年9月26日受理)

### Abstract

This paper studies Korean verbs that have a continuous word of same root (hereinafter referred to as “chain-form” verbs). “Chain-form” verbs, the positioning of which in the range of verbs in the Korean language has been unclear. A “chain-form” verb consists of a noun and a verb that originated from the same root word. The role of “chain-form” verbs is close to that of cognate object verbs semantically, but “chain-form” verbs are morphologically close to compound verbs.

In the method of the study, a number of sentence examples of cognate object verbs and

those of “chain-form” verbs were chosen, and the meanings and roles of these verbs were compared. Next, the prototypes of compound verbs were compared with “chain-form” verbs.

The results showed that “chain-form” verbs can express direct and metaphorical meanings. Therefore, the usage area of “chain-form” verbs is wider than that of cognate object verbs. However, it is not possible for “chain-form” verbs to form sentences like those using cognate object verbs. Also “chain-form” verbs did not fall under the prototypes of compound verbs. In other words, “chain-form” verbs seem to belong to a class of verbs with a unique property that is not found in cognate object verbs or compound verbs.

**Keywords:** cognate object verb, compound verb, chain-form verb, prototype

(Received September 26, 2017)

## 1. はじめに

現代韓国語の動詞には「춤추다 chumchuda (踊り踊る)」<sup>(1)</sup> や「잠자다 jamjada (眠り眠る)」などの同一語根の単語が連続する形態の動詞群 (以下、その形の動詞群を便宜上「連続体」型動詞とする) がある。この「連続体」型動詞は使用頻度が高いと思われるが、先行研究ではあまり論じられなかった。

「連続体」型動詞は語根が同じ名詞と動詞で構成されているため、先行研究では同族目的語動詞と同類の動詞群とみなす見解 (Eckardt, 1965) もあれば、同族目的語動詞とは違う意味役割を持つ合成動詞であるという主張 (홍재성 Hong, Jesung, 1990) もある。このように「連続体」型動詞はその形態や意味役割から、その領域が定めにくいいため、未だにそれらの性質や働きが明らかにされず、考察すべき余地を残している。

本稿では「連続体」型動詞が同族目的語動詞に含められるべきなのか、あるいは、合成動詞に分類されるべきなのか、同族目的語動詞と合成動詞のプロトタイプに基づいて、「連続体」型動詞の位置づけを明らかにする。尚、分析に用いる例文は、韓国で出版された小説や詩から抽出している。

## 2. 同族目的語動詞と「連続体」型動詞

Eckardt (1965) は「連続体」型動詞について、同じ語根の名詞と動詞で構成された動詞であり、同族目的語動詞と形は異なるが、文の中では同族目的語動詞と同じ意味役割を果たしていると結論づけた。その理由として韓国語の会話における対格助詞「을 leul (を)」<sup>(2)</sup> が容易に省略できる<sup>(3)</sup> ことを取り上げている。それでは「連続体」型動詞は同族目的語動詞とみなされるべきものだろうか。ここでは「連続体」型動詞を同族目的語動詞構文のプロトタイプに照らし合わせながら考察する。

## 2.1 韓国語の同族目的語動詞構文の特徴

「連続体」型動詞と同族目的語動詞を比較する前に、韓国語の同族目的語動詞構文の特徴に目を通して置く。韓国語の同族目的語動詞は、英語や日本語における同族目的語動詞と異なる構文をなす場合があるので、韓国語の同族目的語動詞構文の特徴を確認するために英語と日本語の同族目的語動詞構文を比較してみる。

英語の同族目的語動詞については、Levin (1993) が用例を提示して、次のように述べている。

「いくつかの自動詞においては、同じ語根の目的語を伴う場合、それを同族目的語という。文において同族目的語は、意味を自ら提供するために現れるのではなく、それらは常に1つの形容詞によって修飾されるか、あるいは他の副詞句と共に現れて文全体に意味を与える役割をする。大半の同族目的語を取る動詞類は、しばしば統語的な制限があるため、その範囲を広げていくようなことはない。

- a. Sarah smiled.
- b. Sarah smiled a charming smile.  
(roughly: Sarah smiled charmingly.)
- c.<sup>??</sup> Sarah smiled a smile.

(Levin 1993 : 95-96) ]

Levin (1993) によると、英語の同族目的語は、常に形容詞に修飾されるか、副詞句とともに現れるものである。上記の例 [c] は同族目的語に修飾語がないので、英語文として不自然なので用いられないが、韓国語では、大半の同族目的語動詞は修飾語がなくても同族目的語を用いることができる。

日本語の同族目的語動詞について井上 (1966) は、次のように述べている。

「動作の表す働きを受ける目的語の一種で、動詞と同語源・同義の目的語をいう。この場合の動詞は他動詞もあるが、多くは自動詞である。本来自動詞は目的語を取らないが、そのあるものはこの同族目的語を取ることがあり、形容詞を伴った同族目的語は副詞 (句) と同じ働きをすることがある。(井上 1966 : 314) ]

井上 (1966) に従えば、日本語の同族目的語動詞構文は英語と同じ形になると考えられる。つまり、韓国語の同族目的語動詞構文は日本語や英語の同族目的語動詞構文とは異なるところがある。

安井 (1983) に取り上げられた英語の同族目的語動詞構文とそれの韓国語訳を提示すると次の【例1】[A] と [B] のようになる。

【例 1】

「A. He slept a sound sleep.

- a. \* He slept a sleep.
- b. He slept soundly.
- c. \* He slept a sound sleep soundly.

(安井 1983 : 72-73)】

B. 그는 푹 잠을 잤다 (彼はぐっすり眠りを眠った).

- a. 그는 잠을 잤다 (彼は眠りを眠った).
- b. 그는 푹 잤다 (彼はぐっすり眠った).
- c. 그는 깊은 잠을 푹 잤다 (彼は深い眠りをぐっすり眠った).

上記の【例 1】で示したように、英語の同族目的語動詞構文では [a] と [c] が非文になるが、韓国語では非文にはならない。韓国語では同族目的語動詞と同族目的語の出現条件が英語とは異なることが分かる。このような事例をみると、韓国語の同族目的語動詞構文は、英語と日本語より制限や条件が少ないようにみえる。しかし、韓国語の同族目的語動詞には制約が全くないというわけではなく、一定の条件に従って同族目的語を取る。韓国語の同族目的語動詞構文について 이광호 Lee, Kwangho (1988) は下記のように述べている。

「単一文章や内包文章などで目的語標識の対格『을 leul』は、意味論的な成分としての機能よりも統語論的な成分としての機能が充実している。構造的な成分の表面的な実現によって、主語や目的語、そしてそれらを連係させる動詞の行動性の意味とは無関係に韓国語の対格助詞『을』は構造的に名詞句の変項に用いられる助詞である。そして韓国語はごく制限された場合だけに名詞句の変項、つまり、その目的語に対格助詞『을』を用いる動詞の例を持っている。一般的に同族目的語 (Cognate object) の構文に限って対格助詞『을』を用いる動詞『웃다 utta (笑う) / 살다 salda (生きる) / 죽다 jukta (死ぬ) / 추다 chuda (踊る) / 자다 jada (眠る) / 걷다 keotta (歩く) / 꾸다 kkuda (夢見る) / 그리다 keulida (描く) / 울다 ulda (泣く)』などがある。おおむね他動詞が選択上の制約、あるいは意味論的な制約を受けない限り、比較的自由に目的語となる名詞句の変項を支配し、その名詞句に対格助詞『을』を用いる構造的な機能を保つことに対し、我々はそれらと同じく、同族目的語動詞が制限された名詞句 (同族目的語) だけを目的語として受け入れ、それに対格助詞『을』を用いる事実を知っている。そして我々はそれらを他動詞部類として解釈しようと思う。もちろん、このような動詞はその語彙内項 (lexical entry) に同族目的語だけを支配して、その時だけに対格助詞を用いるという条件を念頭に留めておきたい。(이광호 1988 : 128)】

이광호(1988)が述べているように韓国語の同族目的語動詞は、必ず対格助詞「를」を伴って同族目的語を取る。韓国語では対格助詞を取る動詞は他動詞とみなされている。そのため、韓国語の同族目的語動詞は他動詞として扱われるが、英語や日本語のように自動詞としては扱われないのである。

## 2.2 同族目的語動詞構文と「連続体」型動詞構文

ここでは同族目的語動詞構文と「連続体」型動詞構文を比較してみる。まずは下記の【例2】で同族目的語動詞構文を確認してみよう。

### 【例2】

- (1) 키보다 높은 발자국을 밟고 뜨거운 춤을 춘다. 「独舞 1」  
(背丈より高い足跡を踏んで熱い踊りを踊る。「独舞 1」)
- (2) 밤늦도록 잠을 자려하지 않아서 불을 켜다. 「어머니의 일기」  
(夜遅くまで眠りを眠ろうとしなかったので電気を消した。「母の日記」)
- (3) 지난밤 나는 여동생의 꿈을 꾸었다. 「환과 멸」  
(昨夜、私は妹の夢を夢見た。「幻と滅」)
- (4) 소엽은 무겁디 무거운 짐을 진 사람처럼 소파에 몸을 부렸다. 「방황의 끝」  
(ソヨブはとても重い担い(荷物)を担いだ人のようにソファに体を放り投げた。「彷徨の終わり」)
- (5) 아침에 눈을 뜰 때마다 누군가 금을 긋는 것 같아. 내 머리 속에 더이상 계획이 없어. 「환과 멸」  
(朝、目が覚める度に、誰か線を線引いているようだよ。私の頭の中にはもうこれ以上計画がない。「幻と滅」)

【例2】に示したように(1)~(5)の同族目的語動詞はすべて対格助詞「를」とともに同族目的語を受けている。前節で述べたように、この形は韓国語の同族目的語動詞構文のプロトタイプといえる。

次に同族目的語動詞構文のプロトタイプである【例2】の同族目的語動詞の部分「連続体」型動詞に置き換えてみると、【例3】のようになる。

### 【例3】

- (1) \*키보다 높은 발자국을 밟고 뜨거운 춤을 춤춘다.  
(背丈より高い足跡を踏んで熱い踊りを踊り踊る。)
- (2) \*밤늦도록 잠을 잠자려하지 않아서 불을 켜다.  
(夜遅くまで眠りを眠り眠ろうとしなかったので電気を消した。)
- (3) \*지난밤 나는 여동생의 꿈을 꿈꾸었다.  
(昨夜、私は妹の夢を夢夢見た。)

- (4) \*소엽은 무겁디 무거운 짐을 집진 사람처럼 소파에 몸을 부렸다.  
(ソヨブはとても重い担い(荷物)を担い担いだ人のようにソファに体を放り投げた。)
- (5) \*아침에 눈을 뜰 때마다 누군가 금을 금긋는 것 같아. 내 머리 속에 더이상 계획이 없어.  
(朝、目が覚める度に、誰か線を線線引いているようだよ。私の頭の中にはもうこれ以上計画がない。)

「連続体」型動詞をプロトタイプの同族目的語動詞構文に適用させてみると、語彙的に過剰現象が起こってしまうので、【例3】の(1)~(5)はどれも非文となる。「連続体」型動詞は、同族目的語動詞と同じ意味役割を果たせるが、同族目的語動詞と同様の文形成はできないのである。下記の【例4】の「連続体」型動詞構文を観察してみよう。

【例4】

- (1) 꽃피는 춘삼월 더디 온다고, 벌나비 춤추는 해맑은 봄날이 영 안 올까 보냐.  
「가려거든」  
(花咲く春3月遅れてくるから、蜂蝶踊り踊るすがすがしい春の日が全く来ないとでも思っているのか。「行くなら」)
- (2) 그는 지난밤 그네 아래서 잠자다 밤 사이에 죽은 사내입니다. 「환과 멸」  
(彼は昨夜ブランコの下で眠り眠るうち、夜の中に死んだ男です。「幻と滅」)
- (3) 시정에 숨어 숨 고르고 있을, 기이한 나의 친구, 밤마다 병든 나를 꿈꾸고. 「저 먼 우주의」  
(市井に隠れて息を潜ませている、奇異な僕の友、夜ごとに病の僕を夢夢見て。「彼方の宇宙」)
- (4) 내 삶이란게 간단치 않아, 온갖 소리 갖은 벌레 다 살아 떨뛰는, 무슨 허허한 우주. 「무슨」  
(僕の生というものが簡単でなく、ある限りの音、あらゆる虫すべてが生きて跳ね跳ねる、何か虚々しい宇宙。「何」)
- (5) 선실 속에서는 쌈싸우듯 하여 가며 겨우 아침밥들을 먹고와서는 이 구석 저 구석에서 짐들을 꾸리는 빛에... 『만세전』  
(船室内では争い争うようでやっと朝食を食べてきて、あちこちで荷造りをやる様子で…『万歳前』)
- (6) 가슴을 스산하고 날카롭게 금그으며 지나가는 겨울 예감. 『들개』  
(胸をうら寂しく、鋭く線線引きながら行き過ぎる冬の予感。『野良犬』)
- (7) 무슨 짓을 하든 좋은 자리에 있을 때는 세상을 찝찝 먹었지만 이제는 인심도 바뀌었고 사정도 변해버린 판이었다. 『누가 천사를 쏘았는가』  
(何をやって偉い地位にいる時は、世の中を蒸し蒸して食ったが、今は人心も変わり、事情も変わってしまったところであった。『誰が天使を射たのか』)

上記の【例4】(1)～(7)において「連続体」型動詞の示す意味が字義どおりであれば、同族目的語動詞も使用できるはずだが、なぜ、書き手は同族目的語動詞ではなく、「連続体」型動詞を用いたのだろうか。その理由は次のように考えられる。

【例4】の「連続体」型動詞を同族目的語動詞に入れ替えるとすると、文の表現内容に齟齬が生じる。「連続体」型動詞は同族目的語動詞と同じ意味役割を果たすこともあるが、そもそも目的語を取らないので、目的語を必ず取る同族目的語動詞とは異なる働きをすることもある。つまり、「連続体」型動詞は同族目的語動詞のように目的語という具体的な対象を取り立てる役割がないので、文における意味役割の範囲が同族目的語動詞よりも広くなる。そういうわけで、【例4】(1)～(7)の「連続体」型動詞を同族目的語動詞に置き替えると、文の意味としては不要な目的語を取ることになり、文全体が不自然な形になると思われる。なぜならば、対格助詞「을」を伴うと、目的語に焦点が当てられ、意味が具体化されるために直接的な表現になるが、「連続体」型動詞は「을」を取らないため、意味表現の領域にゆとりが生じ、文の内容によっては直接的な表現以外に隠喩的な表現を果たすこともできる。そのような動詞の特徴を考慮して、書き手は文の内容に応じて同族目的語動詞と「連続体」型動詞を使い分けている。

【例4】(1)～(7)のように「連続体」型動詞を用いることは偶然ではなく、書き手の意図によるものなので、同族目的語動詞構文に置き替えられないのである。このように同族目的語動詞では果たせない「連続体」型動詞の固有の意味役割については、先行研究では言及されていなかった。前述したように、Eckardt (1965) は「連続体」型動詞について、同じ語根の名詞と動詞で構成された動詞であり、文の中で同族目的語動詞と同じ意味役割を果たすものと述べている。しかし、その見解は「連続体」型動詞の働きを断片的に表すものであり、【例4】のように「連続体」型動詞が同族目的語動詞と異なる意味役割を果たす場合については考慮されていなかったものと考えられる。つまり、「連続体」型動詞は同族目的語動詞と等しいものではないのである。

### 3. 合成動詞と「連続体」型動詞

「連続体」型動詞は名詞と動詞が結合しているので、この節では「連続体」型動詞を合成動詞のプロトタイプに照らし合わせながら考察する。考察に先立って韓国語の合成動詞について確認しておく、2つ以上の単語（言葉）からなる動詞は複合動詞と合成動詞に区別される<sup>(4)</sup>。複合動詞の場合は2つ以上の単語で構成されるもので、単語が持つ意味をそのまま表すものを指し、合成動詞は2つの単語が持つ意味ではなく、第3の意味、つまり別の新たな意味を表すものを指す。そのため、韓国語の合成動詞は複合動詞と形態は類似しているが、意味役割の領域は若干異なるものである。

### 3. 1 「連続体」型動詞の意味役割

홍재성 Hong, Jesung (1990) は、動詞と語根が同じ目的語(名詞)を「Vk-n」という記号で表すと、同族目的語動詞構文は「Vk-n - 를 Vk」となり、それに対して規則的に「Vk-n Vk」の形態が対応して合成動詞になる、と結論づけている。例えば「잠을 자다 jam-eul jada (眠りを眠る)」という同族目的語動詞構文に対して、規則的に「잠자다 jamjada (眠り眠る)」のように対応する。

この節では「Vk-n Vk」形態の「連続体」型動詞が、合成動詞のように新しい意味役割を果たすのかという観点から分析する。홍재성(1990)は、【例5】で示すように同族目的語動詞構文「Vk-n-를 Vk」に「連続体」型動詞が「Vk-n Vk」形態で規則的に対応し、その対応範囲はすべてに及ぶわけではないが①～⑤を取り上げて「連続体」型動詞を合成動詞であると述べている。

#### 【例5】

- ①잠을 자다 jam-eul jada (眠りを眠る) - 잠자다 jamjada (眠り眠る)  
 ②꿈을 꾸다 kkum-eul kkuda (夢を夢見る) - 꿈꾸다 kkumkkuda (夢夢見る)  
 ③춤을 추다 chum-eul chuda (踊りを踊る) - 춤추다 chumchuda (踊り踊る)  
 ④금을 긋다 keum-eul keutta (線を線引く) - 금긋다 keumkeutta (線線引く)  
 ⑤뛰을 뛰다 dduim-eul ddida (跳ねを跳ねる) - 뛰뛰다 dduimddida (跳ね跳ねる)  
 ⑥웃음을 웃다 useum-eul ustta (笑いを笑う) - \*웃음웃다 useumustta (\*笑い笑う)  
 ⑦놀음을 놀다 noleum-eul nolda (賭けを賭ける) - \*놀음놀다 noleumnolda (\*賭け賭ける)  
 ⑧얼음을 얼리다 eoleum-eul eollida (氷を凍らせる)  
 - \*얼음얼리다 eoleumeollida (\*氷凍らせる)  
 ⑨짐을 지다 jim-eul jida (担いを担う) - \*짐지다 jimjida (\*担い担う)  
 ⑩다리미를 다리다 dalimi-leul dalida (アイロンをアイロンする)  
 - \*다리미다리다 dalimidalida (\*アイロンアイロンする)  
 ⑪튀김을 튀기다 tuigim-eul tuigida (揚げ物を揚げる)  
 - \*튀김튀기다 tuigimtuigida (\*揚げ物揚げる)  
 ⑫받침을 받치다 badchim-eul badchida (下敷きを敷く)  
 - \*받침받치다 badchimbachida (\*下敷き敷く)

(홍재성 1990 : 150) ]

さらに、홍재성(1990)では、「連続体」型動詞が合成動詞であるという論拠として【例6】を取り上げている。

#### 【例6】

- (1) 너도 자주 꿈꾸니? (君もしばしば夢夢見るの?)  
 (2) ①기영이는 (미래 + 영희와의 만남 + 언어학자가 될 것) - 을 꿈꾸었다 + \*꿈을

꾸었다.

(キョンは(未来+ヨンヒとの出会い+言語学者になること)-を夢夢見た+\*夢を夢見た。)

②철수의 큰 형은 어려서부터 훌륭한 독립운동가가 되려고 꿈꾸어왔다.

(チョルスの兄は幼い頃から立派な独立運動家になるよう夢夢見てきた。)

(홍재성 1990: 149-150)』

홍재성 (1990) は「꿈꾸다 kumkkuda (夢夢見る)」について、上記【例6】(1)のような自動詞用法では、「꿈꾸다」は同族目的語動詞と同じ意味を表すが、(2) ①と②については、「꿈꾸다」は「꿈을 꾸다 (夢を夢見る)」とは別の構文を形成し、その意味役割が変化して「未来に対する強い希望」を表すものと解釈している。つまり、(2) ①と②のように「未来に対する強い希望」を表す時、「꿈을 꾸다 (夢を夢見る)」のように同族目的語動詞を用いると非文になるとしている。しかし、(2) ①、②と同じ意味を表す場合においても「連続体」型動詞「꿈꾸다」と同族目的語動詞「꾸다 kkuda (夢見る)」が常に区分されて用いられているわけではない。次の【例7】を見てみよう。

#### 【例7】

세계적인 도시에서 사교계의 신데렐라가 되어보는 꿈을 꾸었었다. 그러나 그런 꿈이 얼마나 가당찮은 것인지를 그녀가 먼저 알고 있었다. 『누가 천사를 쏘았는가』

(世界的な都市で社交界のシンデレラになる夢を夢見ていた。しかし、そういう夢がとんでもないことだというのは彼女が先に知っていた。『誰が天使を射たのか』)

【例7】の「꾸다」は【例6】(2) ①、②と同じく「未来に対する強い希望」の意味を表している。홍재성 (1990) によれば、「連続体」型動詞「꿈꾸다」は同族目的語動詞「꾸다」と同じ意味役割を果たすこともあり、【例6】(2) ①と②のように「꾸다」とは別の意味役割を果たすものである。しかし、【例7】をみる限り、【例6】を根拠にして、常に「꿈꾸다」は自動詞用法以外に「꾸다」とは別の意味役割を果たすものであるとは言い切れないのである。従って「꿈꾸다」と「꾸다」の意味役割に相違がみられる場合があるとしても、【例6】のような用例だけではなく、「꿈꾸다」と「꾸다」それぞれが持つ性質について具体的に観察して見る必要があると思われる。もちろん、次に示す【例8】のように、「連続体」型動詞は文脈に応じて同族目的語動詞と同じ意味役割を果たすこともあれば、合成動詞のように新たにもう1つの別の意味を示す場合もある。

#### 【例8】

(1) 무엇을 생각하는 것도 잡자는 것도 아닌, 괴로와 하는 것도 슬퍼하는 것도 아닌, 정신의 막연한 방치였다. 『추락하는 것은 날개가 있다』

(何かを考えるのも、眠り眠ることでもなく、悲しんでいるわけでもない、

- 精神の漠然とした放置状態だった。『墜落するものは羽がある』  
(2) 책들이 먼지를 뒤집어 쓴 채 서가에서 잠자고 있다. 『그랜드 국어사전』  
(本が埃まみれになって書架で眠り眠っている。『グランド国語辞典』)

【例8】(1) の場合は、「잠자다 jamjada (眠り眠る)」は同族目的語動詞「자다 jada (眠る)」と同じ意味で、実際に「眠ること」を表している。しかし(2)をみると、(1)とは異なる「ある物事が沈滞していること」の意味を示している。とはいえ「連続体」型動詞群のすべてが【例8】のように、字義どおりの意味以外にもう1つの新たな意味を持つわけではない。例えば、【例5】に提示された「連続体」型動詞の中の④と⑤は字義どおりの意味以外に新たな意味役割がみられない。つまり、「連続体」型動詞が常に字義どおりの意味とは別に新たな意味を持つ、とは断定できないのである。従って、「連続体」型動詞の意味役割を根拠にして合成動詞と区分することはできない。

### 3.2 「連続体」型動詞の形態

ここでは「連続体」型動詞の形態に焦点を当てて合成動詞かどうかを検討する。そのため、홍재성(1990)が「連続体」型動詞を合成動詞として表示した「Vk-n Vk」について、김기혁 Kim, Kihyeok(1995)が提示した合成動詞のプロトタイプのモデル「A + B = C」を引用して言い換えると、同じ語根の名詞と動詞が連続しているので「A + A' = C」となる。

#### 【例9】

- ①잠자다 (眠り眠る) ⇒잠 (眠り) + 자다 (眠る)  
A + A' = C [(ある物事が) 沈滞している]  
A + A' = A' [眠る]
- ②꿈꾸다 (夢見る) ⇒꿈 (夢) + 꾸다 (夢見る)  
A + A' = C [(未来に対する) 希望を抱く]  
A + A' = A' [夢見る]
- ③춤추다 (踊り踊る) ⇒춤 (踊り) + 추다 (踊る)  
A + A' = C [(ある物事が) まるで踊るかのように動く]  
A + A' = A' [踊る]
- ④금긋다 (線線引く) ⇒금 (線) + 긋다 (線引く)  
A + A' = A' [線引く]
- ⑤뿔뿔다 (跳ね跳ねる) ⇒뿔 (跳ね) + 뿔다 (跳ねる)  
A + A' = A' [跳ねる]

【例9】①～③は、新たな意味を表す合成動詞のように「A + A' = C」になる場合もあるが、同族目的語動詞と同じ意味を表す「A + A' = A'」になる場合もある。④と⑤については、同族目的語動詞と同じ意味を表す「A + A' = A'」になるが、「A + A' = C」のよう

にはならない。

上記の【例9】で取り上げた「連続体」型動詞①～⑤は、홍재성 (1990) で同族目的語動詞に規則的に対応する合成動詞とみなされたものである。それらが合成動詞なのか確かめてみたが、合成動詞のプロトタイプの条件を満たしているとはいえない。

#### 4. おわりに

本稿は韓国語の「連続体」型動詞を同族目的語動詞と合成動詞のプロトタイプに照らし合わせて考察した。その結果、「連続体」型動詞は同族目的語動詞や合成動詞のプロトタイプとは異なる性質を持っていることが確認された。

「連続体」型動詞について、意味役割は2つの働きがあることが分かった。1つ目は、字義どおり同族目的語動詞と同じく直接的な意味役割を果たす。2つ目は、隠喩的で暗示的な意味役割を果たす。言い換えれば、「連続体」型動詞と同族目的語動詞は文の意味解釈に応じて互換性がある場合と互換性がない場合がある。その理由は、2.2節で例示されたように、韓国語の同族目的語動詞は同族目的語を取る時に必ず対格助詞「을」を用いるが、「連続体」型動詞は「을」を用いることがないからである。つまり、「連続体」型動詞は、単語結合が持つ特性から同族目的語動詞と同じ意味を表すこともあるが、それとは別に、抽象的かつメタファーの文表現を果たす場合もある。そのような語彙的かつ統語的な文の制約から「連続体」型動詞は、同族目的語動詞と異なるニュアンスを帯びようになり、両方の動詞が表す文に表現の相違が生じるのである。その時の「連続体」型動詞と同族目的語動詞の働きの領域は異なっている。さらに、「連続体」型動詞の形態は「名詞+動詞」であるため、一見すると合成動詞のようであるが、新しい意味を作り出す合成動詞のプロトタイプには当てはまらない、「A + A' = A'」のような生産性の低い結合もみられた。

本稿では、「連続体」型動詞が同族目的語動詞や合成動詞のプロトタイプに当てはまらないことについて例文を提示しながら明らかにした。従って、「連続体」型動詞は、同族目的語動詞にも合成動詞にも属さないユニークな形態をした別の性質を持つ動詞群とみなしてよいだろう。

#### 注

- (1) 本稿の例文に併記される逐語訳は、日本語として不自然な表現もあるが、韓国語文の形を崩さないように、単なる記号として置き換えている。
- (2) 韓国語の対格助詞は名詞の終声によって「을 eul」と「를 leul」に区別して使われるが、例文以外では便宜上「를 leul」で統一する。
- (3) 会話における「을」の省略について詳しくは朴恩珠 (2005)、Park, Eunjoo (2016) 参照。
- (4) 韓国語の合成動詞は日本語の複合動詞と少し違いがある。김기혁 Kim, Kihyeok (1995) によれば、合成動詞の構成パターンは「接頭辞+動詞」、「形容詞+動詞」、「名詞+動詞」、「副詞+動

詞]、「動詞+動詞」である。2つ以上の言葉が結合して新たな意味の動詞ができる場合を合成動詞(Compound verb)、2つ以上の言葉が結合して2つの言葉の意味をそのまま表す場合を複合動詞(Complex verb)と区別する。従って、合成動詞の概念は「A + B = C」と表され、複合動詞の概念は「A + B = AB」と表される。但し、複合動詞と合成動詞の領域は明確に線引きされるものではなく、状況に応じて複合動詞の意味解釈になる場合と合成動詞の意味解釈になる場合がある。下記の例を参照のこと。

【例】

「열나다 yeolnada (熱でる)」⇒N「열 yeol (熱)」+ V「나다 nada (でる)」

① 감기에 걸려서 열난다. (風邪をひいて熱でる。) ⇒複合動詞 / 「A + B = AB」

② 순이는 게임왕이 되겠다고 열났다. (スニはゲーム王になろうと頑張っている。) ⇒合成動詞 / 「A + B = C」

本稿の合成動詞のプロトタイプは「A + B = C」の記号で表し、上記の【例】では②の場合を合成動詞と考える。

参考文献

- 井上義昌(1966)『(詳解)英文法辞典』開拓社。  
朴恩珠(2005)“日本語と韓国語の受身文対照研究-被害受身文における誤用をめぐって-”『日語教育』34, 103-124。  
安井泉(1983)“同族目的語機能について”『言語情報』79-92。  
김기혁(1995)『국어 문법 연구』서울 도서출판 박이정。  
이광호(1988)『国語格助詞을/를 研究』서울 塔出版社。  
홍재성(1990)「한국어 자동사/타동사 구문의 구별과 사전」『사전 편찬학 연구 III』서울 塔出版社。  
Eckardt, A. (1965) *STUDIEN ZUR KOREANISCHEN SPRACHE*. Heidelberg: Julius Groos Verlag.  
Levin, J. (1993) *English Verb Classes and Alternations*. The University of Chicago Press.  
Park, E. (2016) On Subject Omission in Japanese and Korean -Declarative Sentences and Adversative passive Sentences-. *International Journal of Korean Studies*, 16, 179-210.

用例出典(用例順)

- 『누가 천사를 쏘았는가』 김홍신, 청맥, 1990  
『추락하는 것은 날개가 있다』 이문열, 자유출판사, 1988  
『그랜드 국어사전』 운평어문연구소, 금성출판사, 1993  
「独舞 1」『나의 新婦에게』 조완호, 혜진서관, 1991  
「어머니의 일기」『국어읽기 2-2』 한국교육과정평가원, 2000  
「환과 멸」『22回 李箱文学賞受賞作品集』 전경린, 문학사상사, 1998  
「방향의 끝」『안개의 城』 金秀賢, 小説文学社, 1987  
「가려거든」『실천문학 3』 박선옥, 실천문학사, 1982  
「저 먼 우주의 / 무슨」『꽃과 그늘』 김지하, 실천문학사, 1999  
『만세전』 염상섭, 일신서적출판, 1997  
『들개』 이외수, 도서출판 東文選, 1989